展 景

No.64

2011 年 12 月 15 日発行
通巻第 64 号　オンライン版 第 4 号

無二の会
muninokai.com

展景 64号

目次

猫のごとくに〈短歌〉……小野澤繁雄 3
秩父吟遊〈短歌〉……河村郁子 4
しんしん〈短歌〉……布宮慈子 5
太陽光発電〈短歌〉……丸山弘子 6
きれぎれの声――あるひはかなかな〈短歌〉……結城　文 7
八ヶ月〈短歌〉……池田桂一 8
平泉〈俳句〉……岩田都女 9
東京歌会（第十九回）……10
近江気まぐれ文学抄33　辻邦生『安土往還記』……新関伸也 11
初詣体験記……松井淑子 12
〈那須通信9〉ひとりの日に……加藤文子 13
〈鳥海山麓だより〉切ない話……鈴木京子 15
対詠 ごきげんいかが？ PART 40……小野澤／布宮／丸山 18
63号作品短評A……19
63号作品短評B……20
「清紫会」だより……21
エッセイ教室「清紫会」の作品より
　その時……池田桂一 22
　おばあちゃんのラッシュアワー行……大石久美 24
　ラッキーの水琴窟……河村郁子 25
　クメちゃん……丸山弘子 26
無二の会短信……28
編集後記……29

猫のごとくに

小野澤繁雄

花がまだ残るうちにて沼のほとり百日紅はもみじし始む

向き変えてこし車両に道の上うろたえていつ猫のごとくに

おおよそは花を減らしてシモツケはこの秋風に身をゆらしいつ

いつの間にというほどの間か菊花はも大通りその両脇飾る

奇でも異でもなく偉観どうやったのか庭に苦しく収(い)れられし車

みしことのなきというより名をしらぬけさあいし花そのこと残る

中待合あればここは外待合か名前呼ばれし患者がいない

間があいて問診票をわたされぬいつからここにそれが判らぬ

としよりの増えしがゆえに必然にドクター声を高くししゆく

支払いで待ち薬で待ちかくありて病院に待つスペースひろし

秩父吟遊

河村郁子

歌の友のこだわり充たす新築の家に訪い来て歌会催す

新しき家の香のなか書斎には七十七歳（ななじゅうなな）の存在感満つ

くきやかに稜線立たせて暮れゆくは秩父連山まなかいにあり

ご自慢の有機農法（オーガニック）の野菜料理その味わいに祖母様思う

秋晴れの朝日を受けて喜寿われら三峯山へ勇み出立

秩父路に深まりゆけば紅葉の未だし渓谷（たに）の流れ清しき

戊年の喜寿なるわれら昇殿の祈禱に与り心祓わる

茂吉翁の歌会なされし小教院にアウラの名残り受けんとぞ集う

木漏れ日のひと日の風情移りゆき朴の落ち葉は地に裏返る

満天星（どうだん）のもみじ葉の赤き華やぎを眩しく思う齢となりぬ

しんしん

布宮慈子（やすこ）

白骨（しらほね）になりたる兄は頑丈な頭蓋と脚をわれらに見せて

アケビの実たんと上がれよ季節の味忘れぬやうに遺影へ供ふ

子が母を母が子どもを思ひやる気持ちの交錯してゐる一日（ひとひ）

ふるさとに居れば季節の巡りきて小鳥とともに冬に入りゆく

ここで生まれここで死にゆくシンプルと思へるひと世もみぢ葉の燃ゆ

肩口のしんしん冷ゆる夜更けなり街灯あをく光を放つ

これまでを洗ひ流してゆくやうに物の整理の続く毎日

捨てゆけば過去はかすかに清まりて実直な文字だけ頭に残る

すとーんとポストに入れたる手紙なり明日の朝までひとり冷えゆく

木枯らしが吹くと間もなくモノトーンの季節の始まりラインを引かむ

太陽光発電

丸山弘子

突然の訪問者原発事故を言ひ太陽光発電の設置すすめる

設置場所の条件満点と携帯に写せしわが家の屋上を見す

とりあへず見積書とて国と都の助成金あるを熱心に言ふ

初期投資の費用わが家に嵩高し割引率の多しと思ふも

いますぐの設置難しこの夏の電力不足は身にしみをれど

新型の商売なるや屋上の賃貸し求むるチラシ入りぬ

会場にややそぐはねどチャリティの出しもの落語の「目黒のサンマ」
（東京オペラシティコンサートホール）

復興をねがひ被災地にとどけよと太鼓の音会場に満つ

チャリティショー話芸・和芸の最後なり十四歳梅丸君の「雨の五郎」は

カレーショップのタイムサービス笑顔よき店員コーヒーをわが前に置く

きれぎれの声——あるひはかなかな

結城　文

梅雨の雨に濡れゐむ墓よ黒御影の石ひそひそと声を出だすや

津波うけし父祖の墓遠く想ふときほのぐらき時間がわれをつつみぬ

ともどもに居場所うつせし壺や像震災にも耐えし午後のしづもり

秋彼岸わが石巻を訪ね来つ三世代なる女集ひて

過去のものばかり住む石巻誰かきて歩むわれのかたへに

大津波を川が呼ぶとは思はざりき静脈のごとき旧北上川

川つたひ奔れる津波船舶も橋にあたりて相つぎ沈む

屋根に乗り流れ来し人橋げたに当たりてたちまち水に没すと

日和山より見下ろせる橋ふたつ旧北上川の上にしづけし

鰯雲かすかに染まるあはひよりきれぎれの声——あるひはかなかな

八ヶ月

池田桂一

墓石の数多（あまた）倒れて無惨にも震災の傷跡ここにも残る

大地震に崩れし石垣隠すごと蔦は覆いぬ六月が経てば

石塀も蔵の損壊も目の前にそのままに在り夢にはあらず

漆喰のはがれ落ちたる蔵の壁竹の骨組み無惨を曝す

日本三大銀山と呼ばれし半田山の崩落の跡二筋見ゆる

灯りなき家より聞こゆ話し声地震に無事をよろこぶ声の

揺れるたび寄りくる飼猫雄のマロ余震怖がるはわれかも知らず

八ヶ月過ぎても余震はまだ続く今朝の震度５の揺れにも慣れて

白々と夜の明けそめて鳥のこえ鳴き交わす間のはげしくなりぬ

咲き終えてうなだれ残るひまわりの一列に佇つ畑の隅に

平泉

岩田都女

蓮の実跳ぶ義経も見し青き空

はるけしや太刀打ちの音秋入日

北上の永久の流れや鳥渡る

蓑虫のゆれつつ暮るる義経堂

高館にかりがね寒き風まとふ

をちこちに籾焚く煙金鶏山

露の世の芭蕉真筆句碑にふれ

田仕舞や大地に眠る古戦場

三代の栄耀釣瓶落としかな

俳聖のなみだ時雨か杉並木

東京歌会（第十九回）

平成二十三年八月十八日（木）。会場は、渋谷区神宮前区民会館三階和室。詠草は、各二首十二首。出席者は、ゲストを含む六名（大石久美、小野澤繁雄、河村郁子、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

・戦災に家を焼かれて火傷負いし一夜の明けて「生きているんだ」

河村郁子

疎開先での被災という。戦災という一般的なコトバより、そのこと（たとえば「疎開先に」）を初句に持ってきた方がよいという声あり。下句は好評。当然に、先の大震災に思い合わせられる歌。出席者に空襲を体験した者が多く、こういっていいかわからないが、話が弾んだ。

・節電はわれらが質（たち）に合ふもののやうだ目標をかるくクリアす

布宮慈子

われらが質（たち）に合ふもののやうだ、にいかにも、作者の声を感じる。今夏が過ぎようというところ、いくらかの達成感がわれわれに残された。

・未曾有なることばが大手をふりてゆくテレビにラジオに出会う人にも

池田桂一

未曾有は、これは漢字でしか表されない。めったに使わない、使えないことば。歌にしめされた違和感は、被災者であることから直接的にくるが、そればかりでもないのだろう。未曾有も一つの説明で、説明は説明できないものを隠すものだ。

・結婚はしたい子供も育てたい徹子の問ひに穂希率直なり

丸山弘子

穂希は、澤穂希。率直なり、は正に率直な感想で、この感想は徹子の部屋に居合わせなくとも、首肯される。「結婚はしたい子供も育てたい」が当然視される答えでないことは、判っていたところ。表現は過不足がない。

・建物が空を美しくする駅舎の上全体晴れてとくに筋雲

小野澤繁雄

二句切れ、四句でも。「とくに筋雲」が全体に結びつきにくいようだ。

・クリスマスローズに志満先生を偲びをり何咲かばひとわれ思ふらん

中川禮子

志満先生は、佐藤志満。佐藤志満と作者の結びつきは、大筋こちらにしられているが、クリスマスローズは佐藤志満の歌にあるのかな。下句は、そういう花がじぶんにはないな、と思わせた。心にしむ。

（小野澤）

辻邦生『安土往還記』

新関伸也（にいぜき）

「私が彼の中にみるのは、自分の選んだ仕事において、完璧さの極限に達しようとする意思である。私はただこの素晴らしい意思をのみ――この虚空のなかに、ただ疾駆しつつ発光する流星のように、ひたすら虚無をつきぬけようとする素晴らしい意志のみ――私はあえて人間の価値と呼びたい」

イエズス会の聖職者に伴って来日したジェノバ出身の船員が記した大殿（シニヨーレ）こと信長は、どこまでも完璧主義者である。天下布武という前人未踏の仕事を遂行するその姿は、まさに流れ星でありその発光の源は、孤独で強固な意志であったと定義する。

この冷徹と言われる完璧主義者の信長を語るために、筆者はスペインで参戦経歴があり、妻に裏切られてその妻と愛人を殺し、イエズス会の聖職者に従って日本にやってきた男を語り部として設定する。日本で滞在していた間に見聞きした出来事を後に知人たちに語った記録を翻訳した、として綴られる。この男は外国人の傍観者であるために当事者にはない観察と冷静なまなざしがある。そこから生まれてくる信長や諸人物は、プロトタイプの歴史小説とはひと味違った人物として示される。

「大殿は『事が成る』ために自分のすべてを――自分の思惑、感情、惰性、習慣、威信、自尊心までを犠牲にした。そしてそうした態度をあえて他の部将、将軍、大名などにも要求した」というように狂気や冷酷、冷徹な信長というよりは、傍観者のむしろ冷静な記録的な文体で、極限に向かう時に見せる信長の苦悩や孤独観などの描写は、むしろ新鮮でさえある。

また「大殿がフロイスやオルガンティノに好意を持ったのは、彼らが、自ら信じるもののために、身命を賭して、水煙万里の異邦にまで来て、その信念を伝えようとした熱意であり、誠実さであった」と綴られる信長は、命を賭けて海を渡ってきた宣教師の心意気と科学的知識に最大の興味関心を抱くのである。無神論者の信長は、宗教的関心以上にその合理的思考と熱意に心動かされていたのである。安土城下にセミナリオを建てさせたのも無垢な信仰心などではなく、その異国に布教しようとする心意気に惚れたためと解することもできよう。信長の心意気、つまり徹底した完璧主義者にみられる合理性は、目的遂行に臨んで本能的に働くセンサーであり、また、それを稼働させるための契機として強い意志が必要だったのである。だがセンサーも時として「和を乞い、帰順を示す相手を斬殺しなければならぬ理由を見いだせなかった」というように、合理性に欠く信長をこの男は淡々と記している。

初詣体験記

松井淑子

今年の正月の午後、急に思い立って、初詣に出掛けた。

元日に神社に詣でる、という正真正銘の初詣をするのは、考えてみれば、これが生まれて初めてである。

参拝先は、うちから徒歩約二十五分の明治神宮である。もっとも詣でるという意識より、朝から飲んだり食べたりの腹ごなしを兼ねた散歩気分のほうが勝っており、あまり混雑するようなら、途中から引き返してくるつもりであった。

表参道側の鳥居をくぐり、参拝客たちにまじって砂利敷きの参道をザクザクと歩く。人員誘導のための警官が大勢出張ってきているが、噂に聞くほど混雑した感じはしない。

ほんとうに混み合うのは、やはり大晦日の晩から元日の朝にかけてかもしれないな。昔と違って、振り袖などの晴れ着姿がまったく見られないのはなぜだろう。外国人も多いが、彼らはどういうつもりで出掛けてくるのだろうか。

そんなことを考えたり、参道に飾られた薦被り(こもかぶ)の酒樽(さかだる)の銘柄を読んだりしながら歩いているうちに、まもなく先がつかえて前に進めなくなった。

どうしたのだろうと思いながら何気なく後ろを振り返って、あっ、と驚いた。前ばかりでなく、後ろにもぎっしり人が詰まっているのだ。いつの間にか大渋滞に巻きこまれて、にっちもさっちもいかない状態になっていたのである。そこここで幼児のぐずる声がする。

こうなったらもう、「混雑するようなら引き返せばよい」などという甘い考えは捨てて、否応なしに詣でてくるより仕方ない。そう覚悟を決めて、人の流れに身を委せることにした。それにしても、拝殿はまだ先である。

南神門という額の掛かった楼門にさしかかると、上から、スズメの賑やかな鳴き声が降ってきた。見上げると、楼上に大きな破魔矢と的が飾られ、的の真ん中に稲穂の束が結わえつけられている。そこにスズメが群がって、歓声を上げながら籾(もみ)をついばんでいる。こちらはのろのろとしか進めないので、気晴らしに頭数をかぞえてみた。全部で二十一羽いた。

いい加減にうんざりして我慢も限界に達しかけたころ、拝殿の前に押し出された。目の前の白布を敷きつめた広いスペースがお賽銭箱(さいせんばこ)の代わりらしい。小銭やお札がつぎつぎに投げ入れられていく。

型通りの拝礼をして、ようやく人混みから解放された。時間を調べたら、鳥居をくぐってから再び鳥居のところに戻ってくるまでに、約二時間かかっていた。日が沈みかけていた。

〈那須通信 9〉

ひとりの日に

加藤文子

霜の降りる朝を何度か迎え、ストーブの出番も多くなった。雪が降る前に盆栽を取り込んでしまいたいのだが、思うようにはかどらない。成長しつづける盆栽達、それが僅かずつであったとしても数が集まると事情は変わる。年々ゆとりがなくなってくる。

入れはじめは温室の棚はどこも空いていて気楽に仕舞えるのだが、最終になるにつれむずかしくなる。最終組は寒さに強いもの、その多くは大きなものだから尚更容易ではない。外棚では大鉢の雪柳や松の類が待ち構えている。

どうすればみんなを温室に納められるのだろう。考えても考えても頭の中は渋滞したままだ。日が落ちて仕方なく一日を終える。

そうして新たな日を迎える。昨日につづき朝は冷えたもののおだやかに晴れる。幸い風もないので、水やりもゆっくり行なえる。

それから今日はひとり。シーンとしていて、理由もなく新鮮だ。心も澄んでいる。何か期待できるような不思議な気持ちが　どこからともなく湧いてくる。そんな寛いだ気分に浸りながら水やりをしていた時、背後から呼び止められたような気がした。

振り向くと落葉したアジサイが目に飛び込んできた。棚上で取り込みを待つアジサイを

見た瞬間、枝をラフィアでたわめてコンパクトにしたら仕舞えるのでは……そんな考えが浮かんだ。枝と枝をラフィアで結んだら、確かに小さくなった。先に温室に仕舞った木々も、同じようにしてみた。そうして、組み合わせが下手だった所も、置き方を変えてみるとさらに余裕ができた。

ここからは早い。頭と体が同時進行だ。何の躊躇もなく、体が、手が、スルスルと動く。はじめから問題などなかったかのように、どんどん片づいて行く。立ち止まってばかりいた昨日が嘘のようだ。

今年も無事に冬を迎えられそうだ。

（注）ラフィア…熱帯アフリカやマダガスカルに生えるヤシの葉の繊維で、園芸用の紐、帽子・敷物などを作るのに使う。

〈鳥海山麓だより〉二〇一一年秋

切ない話

鈴木京子

秋ねえ…。十一月は初旬であってももう「冬」だ。

九月末に刈り入れた稲を二週間ほど天日乾燥させているうちに、冬の気配を感じるようになり、十一月に入ればもう、寒がりの私なんかは外での仕事が苦になってしまう。

だから、この期間、関東で暮らしていた感覚で秋を楽しんでいたりすると、冬支度に出遅れて痛い思いをする。冷たく容赦のない強風と雨がやってくる前に、夏の畑を片付け、来春用にたまねぎの苗を植え、家の周りの風囲いを終わらせる。

そんな暮らしのリズムに気づかなかったころ、「あれ〜、隣りのじっちゃん、もう風囲いしてるよ。まだ早いよね」なんて余裕かましていたら、翌週末には強風と雷と突発的な雨が襲ってきて、あまりに危険で外での作業なんかできなくなった。結局、その年は、冬を迎える作法も、お迎えした冬の怖さも知らないまま、冬に突入した。

思い返すと、移住一年目のあの十一月に「生涯で一番寒かった家」を体験した気がする。今はもう慣れたからネ。

それにしても、今年の秋はどこにあったのかなあ。

ここに暮らすようになって、「収穫の秋」という慣用句も自分にはしっくりこなくなった。品目と量でいえば「収穫の夏」ダヨ。ああ、コメ農家さんにとっては「収入の秋」なのかな。秋ねえ…。まだほんのりと夏の名残があってポカポカとした十月下旬。あの半月くらいが短い秋なのか。関東で着ていた秋用の衣類は、もう何年も着る機会がない。

ところで、どうしてこんなに「秋」を考えてしまうのか。結局「冬」を考えたくないのかもしれない。

昨年は十一月と十二月の二ヵ月間、もち加工場で働いた。時給七五〇円、朝七時半から夕方六時過ぎまで、十二月に入ると日曜日も出勤になった。重いし、寒いし、時間に追われるし。私にとっては過去最強の過酷な労働だったのだが、そこで愚痴もこぼさず主力と

遊佐町から望む十一月の鳥海山

して働いていたのが、四十代後半から五十代の農家女性だった。

彼女たちは「こんな労働条件なのに」と私が腹立たしく思うほど、よく働く。「こんな労働条件」とは、たとえば――。

「作業開始一〇分前に身支度を整えて事務所に集合」が決まりなのだが、事務所の時計は五分進んでいる。一方、作業場の時計は時間ぴったり。だから、十二時に作業を止めて、着替えて、昼食をとって、また着替えて集合するまでの時間は、実際には四五分。上下の白衣、エプロン、帽子、マスクなどの身支度に五分はかかるからネ、四〇分しか休めない。始業時間も一〇分前集合（実際には一五分前！）だが、朝礼には二分もかけずに作業開始となるので、少なくとも毎朝一〇分は余計に働くことになる。さらに、タイムカードは三十分単位なのに、夕方六時十分過ぎの終業が多く、六時三十分になる前にロッカー室から追い出される。

こんな細かい（せこい！）ことが、どれほど会社の利益に影響するのかは疑問だが、加工場を取り仕切る〝（社長の）奥さん〟の激情型性格もあって、なかなか季節労働者が定着しないらしい。

そんななかで、十年近く働いているのが、ミヨちゃん、アベちゃん、オトちゃん、コバヤシさん。彼女たちは、手のひらの水ぶくれが手袋の下でつぶれるほど、つきたての熱い餅を一日中ちぎっては測る。かと思えば、冷たい水で一日中、六〇〇キロの餅米を洗う。驚いたことに、みな農家の跡取り娘だった。

ある日の昼休み、みかんを食べながら「昔だば、みかんの出稼ぎに行ったけよのぉ」とアベちゃんが言った。現在四七歳の彼女が小学生の頃まで、彼女の家では牛の世話がある父親を残し、冬は祖父母と母が静岡のみかん農家へ出稼ぎに行った。私とアベちゃんは五歳しか違わない。一九七〇年代、さみしい庄内の冬をアベちゃんは、母も祖母もなく、父親と孫ばっちゃん（曾祖母）と過ごしたのだ。切ないナァ。

「ミヨコ、おめえだけ休みか？　ああ、おめえ、結婚遅いさけの」

ある日の朝礼で、奥さんが言った。アベちゃんとミヨちゃんは同い年だが、結婚の遅かったミヨちゃんにはまだ小学生の子どもがいて、その学校行事で休むのだという。気にも留めなかったその話を、内緒でこっそり集まった飲み会で思い出すことになった。

ミヨちゃんには三人の娘がいて、長女は高校卒業後、上京を望んでいるらしい。「行ぎてものはしょうがねっ。もう少し餅屋で稼がねばなんねのっ」とミヨちゃんはビールジョッキを持って気合いを入れた。「行ぎてば行がせろ。おめえも苦労したんでろっ」と誰かが応じた。黙って隣りに座っていた私にミヨちゃんが語り出した。「オレ、跡取りなんどものっ、結婚してぇ人できてのっ。反対されるとも思わねで、嫁行ぎてって言ったら、両親もじっちゃんもばっちゃんも『なへ、嫁に行がねばなんねなだ（なぜ嫁に行く必要があるのか）？』ってのっ。で、オレ、結婚、おせえなだ（遅いのだ）」。

一緒に働いてひと月も経たない私にあっけらかんと話しておいて、だけどミヨちゃんは「なへ、嫁に」のところで一瞬声をつまらせ、そのあと、目を赤くさせた。たった二十年しか経っていない別れだもの。切ないなあ。そんな切ない話を、季節労働先の奥さんにも知られてしまう環境で生きてきた二十年だもの。

ひどく切ないヨ。

Photo : Kyoko Suzuki

対詠　ごきげんいかが？　PART 40

２０１１年

小野澤繁雄　M
布宮　慈子　N
丸山　弘子　O

終曲を唱ひて拍手に応へゐる緊張とけしアキカワの顔　9月4日　M
床をただゆきもどりする幼子か吾にすでになきそのよろこびに　9月7日　O
ひさびさの供花にて涼しき彼岸の入りオリエンタルリリーに龍胆添へる　9月20日　M
狭さにもなじみし頃かへやに絵はやまおだまきぞ信州の花　9月27日　O
猛暑にて手入れ怠りしこの夏のカナダオダマキ花見ず過ぎぬ　10月1日　M
秋の声きくとう声にきのうまで日影を今日は日向をえらぶ　10月2日　O
布裁つもミシンを踏むも久しきよ被災者のため手提げをつくる　10月7日　M
14日は鉄道の日つながるがキーワードらし元気ですか？鉄道　10月9日　O
繁りたるカポック切れば塀際の彼岸花紅白に咲くがあらはる　10月15日　M
唇、舌はあるが口はない実体としてはないという解剖学に　10月16日　O
いつまでも口をあけつつ立つて居る赤きポストは人待つごとし　10月23日　N
朝あさに瓶の底よりあらはれて金魚は大口あけて餌欲る　10月27日　M
アパートは空室多し色づかいよきここにして洗濯物さがる一つ　10月30日　O
こんなにも季節の色があるなんて銀杏、紅葉の濃くなりてゆく　11月7日　N
雨蛙いろの小型車にゆきあひぬむかしむかしのルノーのやうな　11月14日　M
飾りにもなれる自動車ＦＩＡＴを飾りとなせる店ここセヴレ　11月15日　O
船便で送らるる途中の車とふ吾の小さなＮＩＳＳＡＮマーチ　11月22日　N
共同の農園ならん花鉢のならべる縁に椅子二つ三つ　12月1日　O
張り替へしオレンジ色の椅子二脚あらたな住まひの真中にあり　12月7日　N
ともに困難な態の会社に子らはいてその「ともに」にし少し慰む　12月8日　O

63号作品短評A〈小野澤〉

●先生と呼ばれてをらる麦藁帽　　岩田都女

一読、なつかしさを呼ぶ。いかにもな夏の句。タイトルは「駒場民芸館」なので、写生句か。夏はこのところ騒がしい。節電で、勤め先も不要な場所は、不要ともいえない場所まで消灯され、そのうち、それがなんだか落ちつくようだった。それまでが明るすぎたのかもしれない。同じく帽子の句がある。「ハンチングそれともパナマ迷ひゐて」。これでよいのかもしれないが、誰が何で迷っているのだろう。昔、洋品店が家業だった頃、帽子屋さんが東京から納品にだろう、円筒形のものを担いで来ることがあり、その人の恰幅のよさ、身じまいのよさが記憶に残っている。

●善光寺大本願へ直行す　上人様との御目文字叶う　　河村郁子

直行す、に、叶う、に悦びがにじむ。一連は「信州・善光寺」。「『生きる』というテーマの展示に」、歌（墨書）を寄せたようだ。同じく「奉納せし『はやぶさ』詠みたるわれの歌上人様のみ声に包まる」の歌もある。どの歌も直球で、気持がストレートに伝わってくる。「お朝事のお数珠頂戴と法要は亡き父母の在りし日のまま」。お朝事（あさじ）は、善光寺で三百六十五日欠かさず行われている法要。その前後に行われる儀式「お数珠頂戴」も同じ。下句で、観光客の歌でなくなった。戦時中、の歌、本堂にて、の歌、もそう。

●生ひ茂る蔦の葉の形やはらかく覆ひ尽くさむ二〇一一　　布宮慈子

タイトルは「散歩」。だが、この歌にみられるようにすべて、三・一一以降の歌といえる。形あるものを作者はみつめているが、その先は想像だ。われわれは、二〇一一を忘れるだろう。五首目、六首目も、そのような反省的な歩みになってしまう「散歩」の歌だ。六首目はこう、「白鷺と白き猫に会ふその角を曲がれば白の防護服に合はむ」。われわれは、生き残った者でもある。「生きてゐるものは動きて痛みもつ捨てられてゐる傘と自転車」。

●嵌めころしの窓下つつじの開花して雨後の夕陽に居すくまれゐる　　丸山弘子

嵌めころし、は嵌め殺し。結句「居すくまれゐる」つつじ、を導くのに、その窮屈さに説得的に働く。雨後の夕陽の、なんということのない事後感、にも覚えがあるように思われた。窮屈さは、六首目にも。「駐車場の屋根の隙より藤の花雨にしをしを房たれさがる」。タイトルは「花思ふのみ」で、花の歌が、「なでしこ（達）」を含んで七首。

63号作品短評B〈慈子〉

●掌側に腕時計みせて少年は沼のほとりのベンチにありぬ　　小野澤繁雄

掌は「てのひら」と読ませるのであろうか。作者は、ベンチに座っている少年の細かいところまでを観察している。腕時計が外側に向いていようと内側であろうと個人の好みであって、取り立てて問題になることではないようだが、それは違う。少年期、少女期にあっての、些細なことへのこだわりは大変なものだ。そのころ特有の感覚は、膨大な時間の上にポツンと一人浮いている気分とでもいおうか。日常となった腕時計のはめ方は、少年の性格までも表している。作者の観察眼によって、ひとりの少年があぶり出されてくる。物憂い様子や将来への不安、恋への予感または失恋などが想像できる。作者の観察眼により、淡々と事実だけを述べたことによって歌の奥行きが出ている。

●ダッシュには感情のニュアンスの微差ありと我(あ)は思ひつつ論を聴きをり　　結城　文

エミリー ディキンソンは広辞苑によるとこうだ。「アメリカの女性詩人。終生独身で隠遁し、愛・宗教・自然を主題とする短詩を書いた。アメリカ新詩運動の先駆。（一八三〇～一八八六）」。作者は、卒論で選んだ人、ディキンソン学会なるものに参加している。「卒論より半世紀経て」とあるから感慨深いものがあるだろう。そのなかで、おそらくはパネラーの論を聴いているときに自筆原稿のダッシュを思い浮かべ、微妙な感情を表していると感じている。聴衆のなかの自分、耳で聴いていることと頭のなかの考えが分離しているところがおもしろい。ダッシュというなんの変哲もない記号を、肉筆から温かみを読み取った作者。感性が豊かである。

●裏座敷の床の間の壁抜け落ちて沼からの風が通りぬけてゆく　　池田桂一

なんということだろう。津波の被災地の映像はよく見たが、宮城県に近い福島県の内陸でも、こんなに被害があったのか。壁がなくなって、風が通るようになってしまったとは。笑うに笑えぬ現実を作者はひょうひょうと捉えているような気がする。「続く余震」の一連は、地震が起きてから今日までの記録であり、決して忘れることのない状況をていねいにうたっている。読者は、作者に寄り添いながら自分の想像力を働かせるしかない。一首目「信号に停る車の揺れ続く　進まぬいらだち　橋よ落ちるな」は、逃げるときの必死さが伝わり、息づかいまで聞こえてくるような歌である。

「清紫会」だより

◆第85回　七月二十一日（木）、会場・池袋ぬかりやビル二階ルノワール一号室

今月は、外山滋比古先生がおやめになって以後の最初の清紫会である。これまでも先生が欠席され、会員だけでの合評会にしたことは何回かあったが、今後もう先生にいらしていただけないとなると、なんとなく気勢が上がらない会になってしまった。

〈提出作品〉大石久美・熱中症／小野澤繁雄・待つしかない／河村郁子・ラッキーが死んだ日／林博子・ジギタリスの思い出／丸山弘子・清二さんのこと／結城文・ギリシャ世界詩人会議―アテネからラリッサまで

◆第86回　八月十八日（木）、会場・神宮前区民会館三階和室

〈提出作品〉大石久美・蟬時雨（Ⅱ）／小野澤繁雄・選択肢／河村郁子・ラッキーの荼毘と納骨／林博子・蟬

◆第87回　九月十五日（木）、会場・神宮前穏田区民会館一階第一会議室

〈提出作品〉小野澤繁雄・雲が動いて／河村郁子・ラッキーの水琴窟／林博子・八〇〇字の壁／丸山弘子・クメちゃん／結城文・イエローストーン国立公園

◆第88回　十月二十日（木）、会場・神宮前穏田区民会館二階第三会議室

〈提出作品〉池田桂一・その時／大石久美・おばあちゃんのラッシュアワー行／小野澤繁雄・雲が動いて―続き／林博子・終の住処／松井淑子・お馴染みさん／結城文・陸前高田から石巻へ

（松井）

エッセイ教室「清紫会」の作品より

その時

池田桂一

郷里に戻って十六年目の今年は、とんでもない年になりました。

生前に、祖母から何度も聞いていた、自分たちの住んでいるところは、岩代の国といって、地震はこわくない。地盤が岩なのだからということでしたが、幼い頃の地震では、たしかにそう信じきっていて、何事もありませんでした。

ところが、今度の地震は通用しなかったのです。

調べてみると、うそではなかったのですが、いま住んでいるところは、数千年前は阿武隈川の流域内の河川敷の範囲だったのです。

西には福島盆地縁断層帯があり、東は双葉断層に囲まれているのでした。

三月十一日は、いつもの喫茶店「遊」で昼食をとり、遅れている原稿を仕上げて、コーヒーを手にしている時でした。

受け皿に戻したカップが踊り出して、押さえようとしたのに、手からすり抜けて、足元に落ちてしまうほどの揺れが続き、店内では悲鳴が上がりました。

飾り棚にある人形や植木鉢などが、床に落ち始め、大きく長い揺れが続きました。外に出るように大声を出して、立ち上がりましたが、揺れがあまりに大きくて、ふんばるのがやっとで、一歩も進めません。動こうとしても、テーブルに手をついて押さえているのではなくて、ふんばって倒れそうになる自分の身体を守ってもらっている有様でした。

店内には、陶器類や小物の展示コーナーの一角があり、棚は倒れることはなかったのに、長く続いた揺れで、ほとんどの商品は落下してしまいました。

まだ揺れの続くなか、数人ずつ手を取り合って、外に出ると、東側の十メートルほど先の四号国道は、一台の車も走っていませんでした。

お店は、やや高いところにあり、駐車場に降りる石段のところで、皆立ち止まったままでいると、誰かが「ああっ！」と叫びました。

目の前の駐車場の方を見ると、車の間のアスファルトに亀裂が入ったかと思うと、十センチほどに広がり、五、六メートルにも及ぶ割れ目が、開いたり閉じたりを繰り返しました。互いに指差しながら息をのみ、ただ見つめるだけでした。

そんな折、頭をよぎったのは、家に戻らなければということでした。阿武隈川を渡る橋が落ちたら帰れなくなる。そう思った瞬間、車に乗り込み、エンジンを掛けていました。

四号国道には停車している数台の車がありましたが、信号は消えていて、かまわずに走り抜けました。せまい道に入ると、屋根瓦が路上に散乱している箇所があり、左右の家々の屋根を注意して見上げながら進みました。

時折、前方にバラバラと落ちてくる瓦の破片に気を配り、急ブレーキを掛けたりして走り続けました。

いつも渡っている伊達崎(だんざき)橋は、落ちることなく無事に目の前にありました。一台の前を走っている車が、橋を渡りきろうとした時、急ブレーキを掛けたのです。橋と道路のアスファルトの間に段差があったのでした。

その先のアスファルトの道路は、十センチほど落ち込んでいて、ヘビのような何本もの亀裂が入っていて、すんなりとは走れませんでした。

わが家への最後の曲り角を左折して、ほっとしたのも束の間、前方に道の中程まで、異様にこんもりした道路が見えていました。近づくと、わが家の石塀が、見事に倒壊しているのでした。

（二〇一一年十月二十日）

おばあちゃんのラッシュアワー行

大石久美

私の所属している歌誌「綱手」は月刊ではあるが、東京では、奇数号を編集、校正をしている。私は、その校正の三日間、代々木の印刷所に朝から通う。当然、朝のラッシュアワーの時間帯であり、人波に揉まれることになる。

まず、この時間帯の乗客は、学生やサラリーマン。十代から上はせいぜい六十代迄、私などの年齢層は殆どいない。座席の側に、ぎゅう、ぎゅう押し込まれることがあっても、「こんなバアさんが今頃どうして乗っているの？」と若い人達の冷たい視線を浴びるばかりである。

まずは朝のメトロ、西葛西駅、ここで乗るのを遠慮していたら、次の車輛からも溢(こぼ)れる。永年の修練で、そこはまず、右か左、扉のすぐ横に張りつく。張りついたら、手摺を探し金輪際、離れない。これが年配者が押し出されない唯一の手である。

以前、扉のすぐ後ろに乗り、次の東陽町駅で押し出され、危うく怪我をするところであった。駅員が素早くカバーしてくれたので、助かったことがある。

東西線と大江戸線の乗換駅（門前仲町）もこれまた緊張の一刻である。東西線では、わっと一固まりが飛び出した後、素早くそれに続く。乗り込もうとした人達が、私の杖を見て思わず足を停める。その瞬間に人混みの外に出る。このスリルが私には堪らない。今日のこの一刻が、いちばん緊張して壮快なのである。

大江戸線では、満員の電車をやり過ごして一番前に立つ。みるみる私の後ろは人で脹れ上がってゆく。ここでは、一番先頭を利用して、電車に乗ると出来るだけ奥に進むようにする。発車すると、ここからは、月島、勝どき橋、築地市場(しじょう)と、少女の頃の懐かしい街を過ぎてゆく。降りる人が徐々に多くなり、麻布十番、六本木迄来ると夜の賑わいはどこへやら、駅の構内も閑散として、車内も空席が多い。面白いことに空席が多くなると居眠りをする人が殆ど無くなる。

代々木では、エレベーターで一挙に地上に出る。踏切を渡り、明治通りに面した社屋に入ると、受付には、いつもの小母さん達がにこやかに出迎えてくれる。そうして私の緊張した一日が始まる。

（二〇一一年十月二十日）

ラッキーの水琴窟

河村郁子

飼い犬のラッキーとの散歩は、日課の始まりをいつも楽しくさせてくれる。特に、雨上がりの朝の日の散歩は格別である。

家の前がまだ草むらであった頃、草の葉の先に夜来の雨の雫が今にも落ちそうに残っていて、朝日に煌めくのである。

このような朝は、手早くお互いの散歩の身支度を整え、「レッツゴウ」と気合を入れて、出かける。ラッキーは二歳ぐらいまでは門を出てから真っ直ぐに草むらの中に飛び込んでいった。そのうちに、脚やお腹がぬれるのが不快になってきたらしい。

その頃から、道路際の排水口へ向かうようになった。

縁石に後ろ足の片方をのせて、石原裕次郎よろしく小用を足すのである。脚の短いダックスフントでも十分に格好がつくし、朝一番で所要時間も長いから、自ら探し当てたスタイルなのだろう。

この間、私は、じっと待っているわけではない。私の耳に摩訶不思議な音色が入ってくるのである。まことに尾籠な話で申し訳ないが、排水溝の中の水と、ラッキーの小水との音が反響して醸し出す美しい音色である。ラッキーも自ら創り出した音に満足しているようである。背中のセピア色の毛並みがなめらかに輝いている。

排水溝の中の水の量によつてオンショクが変わるし、水が無ければ、この恩恵を受けることはできない。「仕方がないね」と身体言語でお互いに諦める。

この習慣がすっかり定着してきたある日、散歩をしている一人の老紳士が立ち止まった。

「この犬エライね。
いつもここでオシッコするの。
躾をしたの。
こんな犬初めて見たなぁ」

と、矢継ぎ早に問いかけられた。

私は黙って微笑んでいた。じっと我慢していたのである。ここで、講釈を垂れてはならないと、我慢をしていた。

これこそ、ラッキーと私との秘密の宝物なのだ。

（二〇一一年九月十五日）

クメちゃん

丸山弘子

水戸に住んでいる従兄から電話があった。

連れ合いに先立たれ、子供達も独立して今はひとり暮しだ。

母方の従兄で、生年は一年早いが学年が一緒なので、互いに「クメちゃん」「ヒロコちゃん」と、名前を呼んで付き合っている。

彼は建設会社に就職した。配属先は水戸だった。何年かのち結婚した時、家を建てた。

そのことについて特に聞きもしなかったが、水戸に骨を埋める気なのだと思った。

三月十一日の地震のあと話をした。あの大きな揺れは男でも恐かったよ、近所ではかなり被害があったそうだが、自分のところは廊下の大硝子が一枚割れただけですんだ。しかし二日ほど経って、お寺から石塔が倒れていると連絡があり、早速直したが、それがちょっと散財だった、と言っていた。

そんなことを話して半月ほどしか経っていない。なんだろうと思っていると、

「水戸に友達いるかい？」

「いないけど」

「それがおかしいんだよ。二、三日前、お墓参りの帰りに寄ったお茶屋で、変な人に会ったんだ。ヒロコちゃんのこと知ってる、というんだ」

お互いに東京育ちだとわかり、名のりあったという。そして従兄が神楽坂に住んでいたことを言うと、その人、しばらくして

「親戚にマルヤマヒロコさん、いるでしょう？　私、その人知ってるわ」

神楽坂に住んでいたわけではないというが、従兄の家のまわりのことをよく知ってて、出たら目を言っているようには思えなかった、という。

友達に神楽坂の近くに住んでいた人はいた。

「矢来町に親しくしていた人はいたけど、何年か前に亡くなったしねえ……。今言ったその方の名前、というか姓、旧姓？」

「違うと思うよ。その名に覚えがないのなら。又会えますね、ナンテ言ってたから、今度会ったら聞いてみるよ」

その後一ヵ月ほど経つが、今のところ何の連絡もない。

さて、名前といえばクメちゃんと呼んでいるこの従兄、クメシロウという。

昔のことだから兄弟は多く、男四人女三人の七人兄妹だ。女性はともかく男の名だが、上からキイチロウ、コウジロウ、トモサブロウ、そしてクメシロウ。漢字では粂四郎と書く。

「前から聞いてみたいと思っていたのだけれど、クメちゃんの名前、誰がつけたの？　多

くない名前でしょ。特にこの『粂』という字を使っているのは」

「そうねえ。今までに会った記憶はないなあ。おじいさんがつけたと聞いてるよ。昔、浦辺粂子っていう女優がいたんだけど、覚えているかい？」

「覚えているわ。関係あるの？」

「ウン。おじいさんね、その浦辺粂子の熱烈なファンだったんだって。売れていたんだね、そのころの浦辺粂子。そこへ僕が生まれてね、粂の字を使おうと思ったらしいよ。男で四番目だから、粂四郎、というわけ。そう聞かされたよ。本当かどうか。マユツバだけどね」

きっと本当のことだと思う。

無口な人で、特に可愛がられた記憶はないけれど、おじいさんて、案外ミーハーなところのある人だったのだ。

（二〇一一年九月十五日）

無二の会短信

◆震災後、すっかり寝坊になった。早く目覚めると、布団の中で色々と考え事をしてしまうのである。被災された沿岸の人々は何もかも無くし、その限られたプレハブでの生活は想像を絶するものがある。震災前は夜になると門を閉め、朝は開けにいく日課があった。いまは新聞を取りに行くだけで、目にするのは片付かない瓦礫と倒壊寸前の下屋である。幸いにも、自分は五体満足で住む家もある。不平を言う境遇ではない、と諌めている毎日である。　池田桂一

◆散歩道に烏瓜を発見した。俄かに姿を現した感じ。草色の丸々とした烏瓜。赤くなりゆく次第を見たいとその垣根に通った。烏瓜は日毎に数を増やし十二個目まで姿を見せた。十月三十一日現在、烏瓜の色は紫がかってきた。真っ赤に熟するのは何時か。　岩田トメ

◆朝の散歩も、一時間ではコースも限られます。思い切って先日は、間の橋を渡り、隣町の川土手の上にのびている道を選択しました。ジョギングコースとしても整備された道です。街中と違って、晴れ上がってくる空の変化も新鮮で、結果二時間の遠出となりました。　小野澤繁雄

◆練馬区高野台の我が家から見える秩父連山は、視角二十度ほどの高さの遠山である。十月末に短歌の吟行で秩父に出向き、眼前の山あいに沈む夕日を堪能した。古くから秩父に根付いてきた文化にも接してきた。　河村郁子

◆学生と語る日常において、生きにくい時代になったと痛感する。就活一つを取ってみても、相当な時間と労力を掛けて社会に出る時代となった。自分の学生時代と隔絶の間があり、申し訳ない気がする。学生は金はないが暇はあると思っていたが、今は両方ないのである。　新関伸也

◆急ぎの用があって郷里との間を飛行機で往復した。紀伊半島の上空と覚しいところで、これまで経験したことのない激しい揺れを感じた。「心配ありません」との機長のアナウンスがあったが、心配のあるときほど、心配ないというのではないかと思ってしまった。　松井淑子

◆二週間以上皮膚科通いをしている。枝落しをした庭木を、束ねる手伝いをしたのが原因らしい。両腕がかぶれて真赤である。以前にも経験があるが、今回はその時よりひどい。年齢で抵抗力が落ちたのだろうか。塗り薬だけではおさまらず、飲み薬も併用している。　丸山弘子

◆モンゴルに来て早三ヵ月。少しずつ寒さに慣れたと思うと、翌日はさらに寒くなっている。晴れた日は、日の光をあびた粉雪が、空中をキラキラと舞う。スターダストというのだろうか。自然の厳しさと美しさにしばし見とれた。　山内ゆう子

◆何気なく庭の東南の角へゆくと、山茶花が咲いていた。この木は、私の背丈より少し高いのだが、紫陽花の蔭になって窓からは見えない。去年までは「この木何の木」だったのだが、花が咲いて、はじめて山茶花と分かった。時が来れば花をつけるのを見るのは愉しい。　結城　文

編集後記

◆「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例(ためし)なし。世の中にある人と、栖(すみか)とまたかくのごとし」。まさしく方丈記のこの一節を実感する年であった。三・一一の震災をはじめ、私的なことでも思いも寄らぬことが起きた。ついには、生まれ故郷への転居という一大決心をするに至った。いずれは郷里に帰ることになるかもしれないとは考えていた。大震災以降は、それが近い将来という気がしていた。しかし、こんなに早まるとは、やはり思っていなかった。親しい人たちとの別れも十分にしていない。失礼していることも、たくさんあるだろう。ただ、そうはいっても前進するしかないときがある。足を踏み出せば開けてくる——そんな予感とともに、一日一日をしっかり生きようと思っている。

◆山形の冬の天気は変わりやすい。青空が出ていると思っていると、しばらくして雨。夕方になって気温が下がれば雪に変わるかもしれないと思う。けれど、その変化がおもしろい。蔵王の見える窓から一日に何回も眺める。てっぺんが見えたり、全体がほとんど雲で隠れてしまったり。新しい生活をたのしみながら、日々小さな発見をしている。驚きは、さざ波のように響いてきて、気持ちを豊かにしてくれる。

（布宮慈子）

展景64号

二〇一一年十二月十五日　発行

編集・発行人　布宮慈子

オンライン版制作　堀　哲郎

無二の会・展景発行所
山形市上町

muninokai.com

Copyright©2011 MUNINOKAI. All rights reserved.